

# 紀 要

第 20 号

2007. 3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

# 檜隈寺式軒丸瓦の成立と展開

北村 圭弘

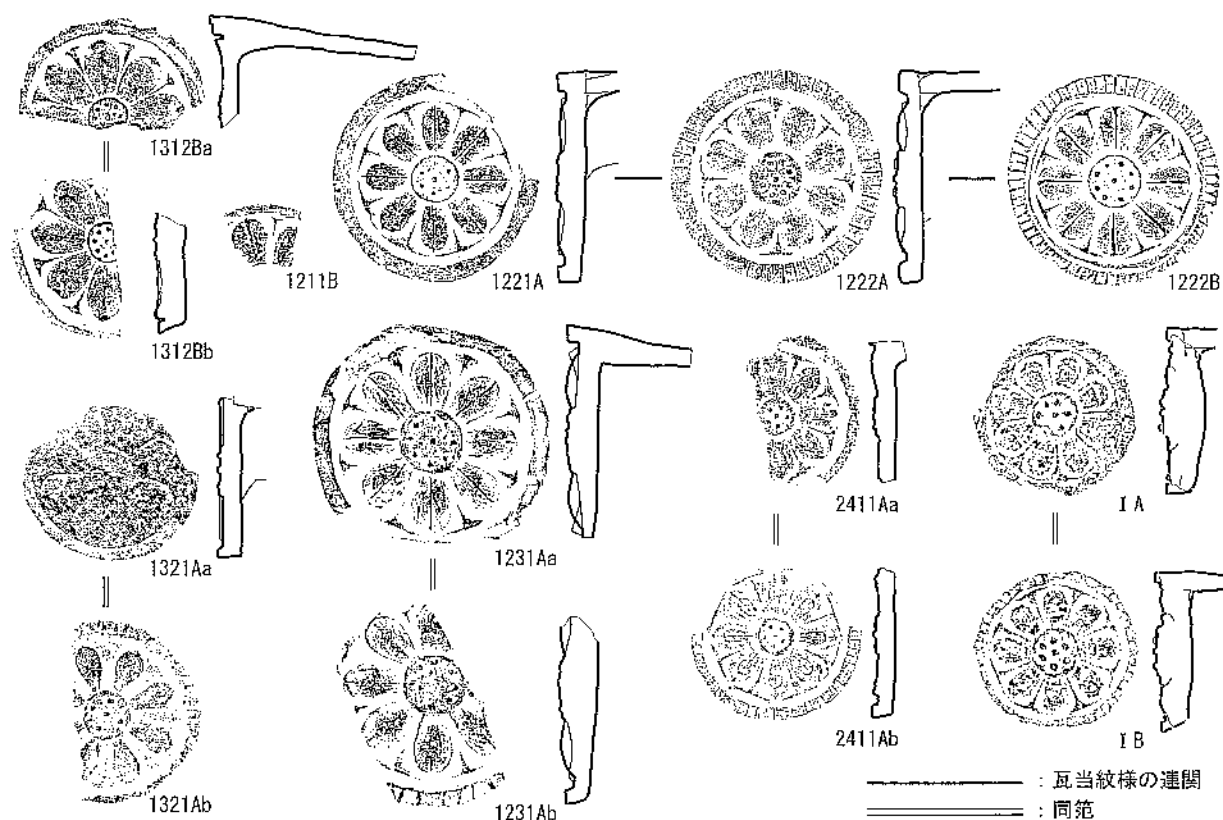
## 1. はじめに

檜隈寺跡は奈良県高市郡明日香村檜前に所在する。渡来氏族の雄・東漢氏がその本拠に建立したとされる。出土瓦からみると、草創は7世紀前半代に遡上するとみられるが、発掘調査でみつかった特異な伽藍配置の堂塔は、まず7世紀後半代に金堂と中門、ついで7世紀末頃に講堂や塔がつくられたと推定されている。檜隈寺式軒丸瓦とは、この金堂創建時所用瓦と瓦当紋様の要素（単位紋様）と構成（紋様意匠）とが等しい軒丸瓦、およびそれに系譜づけられる瓦当紋様の軒丸瓦の総称である。

檜隈寺金堂創建時所用軒丸瓦は外区平縁に輻線紋をめぐらせる。輻線紋とは、車輪状の密な放射線状短線紋様をいう。檜隈寺式軒丸瓦は、この外区紋様によって輻線紋縁軒丸瓦の一として取り上げられる。昭和58年（1983）、山崎信二氏<sup>1)</sup>は輻線紋縁軒丸瓦についてはじめて本格的に検討し、その分布状況を明らかにしたうえで、蓮弁の形状に基づきⅠ～Ⅲ型式に分類した。すなわちⅠ型式は無子葉蓮華紋（以下、素弁蓮華紋）軒丸瓦、Ⅱ型式は有子葉蓮華紋（以下、単弁蓮華紋）軒丸瓦、Ⅲ型式は檜隈寺式に相当する複弁蓮華紋軒丸瓦である。そしてⅠ型式については態度を保留しつつも、Ⅱ・Ⅲ型式については密接に漢人系渡来氏族の建立寺院と関連づけられると結論した。昭和62年（1987）、小笠原好彦氏<sup>2)</sup>はこうした山崎氏の研究を受け、その類例を補足しつつ、輻線紋縁軒丸瓦が近江に集中することを明示した。また、輻線紋縁軒丸瓦は新羅に起源し、まず最初に「大津北郊」の渡来氏族の寺院建立にあたって採用され、やがてそれが他地域の渡来氏族の寺院建立にあたっても伝播したと考えた。

輻線紋縁軒丸瓦については上述の如く、その所用寺院の檀越をめぐる論説が盛んであるものの、実はそれそのものの基礎研究は立ち遅れている。たとえば、小笠原氏が輻線紋縁軒丸瓦の起源を新羅のそれに求めることについて、大脇深氏<sup>3)</sup>が彼我の輻線紋は表現が異なるうえ、時期的な先後関係もいまのところ整合しないと指摘していることは、現象面の解釈に偏りがちな研究の現状を象徴的に示している。事実、輻線紋縁軒丸瓦を語るうえで欠くことのできな

る。事実、輻線紋縁軒丸瓦を語るうえで欠くことのできな



1312Ba・Bb：宝光寺、1321Aa・Ab：上岡部廃寺  
 1211A：穴太廃寺、1211B：坂本八条廃寺、1222A：穴太廃寺、1222B：穴太廃寺・南滋賀廃寺、1231Aa・Ab：南滋賀廃寺  
 2411Aa・Ab：安養寺廃寺、IA・B：五反廃寺

図1 同範・同紋の輻線紋縁軒丸瓦と素紋縁軒丸瓦 (S=1/8)

註所引文献および参考・引用文献から作成（断面実測図は再トレース）

い、次のことすら明確には意識されていない。

すなわち、瓦当紋様の要素と構成とが輻線紋縁軒丸瓦にほぼ等しいにもかかわらず、外区が素紋縁となる軒丸瓦の存在である。それは、たとえば大津市穴太廃寺1222A・B(=山崎Ⅰ型式)に対する1221Aの如くであり、こうした例は、上原真人氏<sup>14)</sup>が1222A・Bを草津市宝光寺跡の輻線紋縁軒丸瓦1312B b(=山崎Ⅰ型式)に系譜づける一方、素紋縁化した1221Aを1222A・Bの退化型式と見たように、輻線紋縁軒丸瓦の存在を前提とした型式変化のなかで理解されてきた。しかしながら、実のところ宝光寺1312B bは素紋縁軒丸瓦1312B aと同範で、1312B aの瓦範に輻線紋を彫り加えた瓦範を用いて作られている<sup>15)</sup>。そして、これと同様の同範関係は大津市南滋賀廃寺1231A a・A b(=山崎Ⅰ型式)、彦根市上岡部廃寺1321A a・A b(=山崎Ⅰ型式)、近江八幡市安養寺廃寺2411A a・A b(=山崎Ⅱ型式)といった滋賀県内の事例ばかりでなく、岡山県真庭市五反廃寺ⅠA・B型式(=山崎Ⅱ型式)においても確認できる。こうした事実は、穴太廃寺1222A・Bと1221Aの如く、それらがたとえ別範であったとしても、輻線紋縁軒丸瓦は素紋縁軒丸瓦の存在を抜きには語れないことを明

確に示している。このことは、山崎Ⅲ型式に相当する檜隈寺式軒丸瓦についてもあてはまるから、輻線紋縁は檜隈寺式軒丸瓦を定義づける充分条件ではあっても必要条件ではないことがわかる。

平成18年(2006)1月に開催された第9回古代瓦研究会<sup>16)</sup>では、この檜隈寺式軒丸瓦がテーマの一つであった。しかしながら、そこでは如上の視点を欠いていた<sup>17)</sup>。本稿ではこうした問題意識から、まず標式となる檜隈寺金堂創建時所用瓦を検討し、檜隈寺式軒丸瓦の特徴を明示したい。ついで、大和と近江に限って分布するその基礎資料を提示し、檜隈寺式軒丸瓦の成立と展開、およびその歴史的背景について考察する。

## 2. 大和の様相

### (1) 檜隈寺跡(高市郡檜前郷、高市郡明日香村)

#### 遺跡の概要

高市郡南部の檜隈郷周辺一帯は天武朝頃までは「今来郡」と呼ばれていた。「日本書紀」欽明天皇七年(538)七月条の「今来郡」の奏言中に「川原民直宮、檜隈邑人也」とみえる如くであり、雄略紀は百済の貢進した工人に「今来」「新漢」を付し、「坂上系図」に引く「新撰姓氏録逸文」には「爾時、阿智王奏して、今来郡を建むとまうす。後に改めて高市郡と号く」とみえる。そして、「続日本紀」宝龜三年(772)四月庚午条にみえる坂上菟田麻呂の奏言には、高市郡内には阿智使主一族とその配下の十七県の民の子孫が満ちて、他姓は十に一・二にすぎないとある。阿智使主は東漢氏の祖とされ、坂上氏はその一族。菟田麻呂の子の田村麻呂が創建にかかわった清水寺(京都市東山区)の縁起に檜隈寺についての所伝がみえる。すなわち、康平七年(1064)年以降に成立した「清水寺縁起」によると、檜隈寺は道興寺と号し、阿智王が渡来したときに賜った高市郡檜前郷に建立されたとする。檜隈寺は東漢氏一族がその本拠地に建立したと見てよいだろう。史料上の初見は「日本書紀」朱鳥元年(686)八月己丑条で、檜隈寺と軽寺・大窪寺に封戸を三十年に限って与えたとみえる。このことは同月辛卯条の巨勢寺に二百戸を与えたという記事とあわせて、天武朝では飛鳥から下ツ道を経て紀伊に至るルートを重視したため、そこに点在する寺院を優遇したとの指摘がある<sup>18)</sup>。

昭和44~45・54~58年(1969~1970・1979~1983)に発掘調査が実施され、特異な配置の伽藍遺構がみつかった。すなわち南に金堂、北に講堂があって、両者が南北にやや長い回廊によって結ばれ、西に中門が開く。伽藍中軸線は地形に応じて北からやや西に振れる。塔は回廊中にある。金堂と講堂との中軸線から東にはずれた位置にあり、三者が一直線には並ばないという特徴がある。講堂は、渡来氏族との関係が指摘される瓦積基壇<sup>19)</sup>である。出土瓦からみると、7世紀前半代にも小規模な仏堂等が営ま

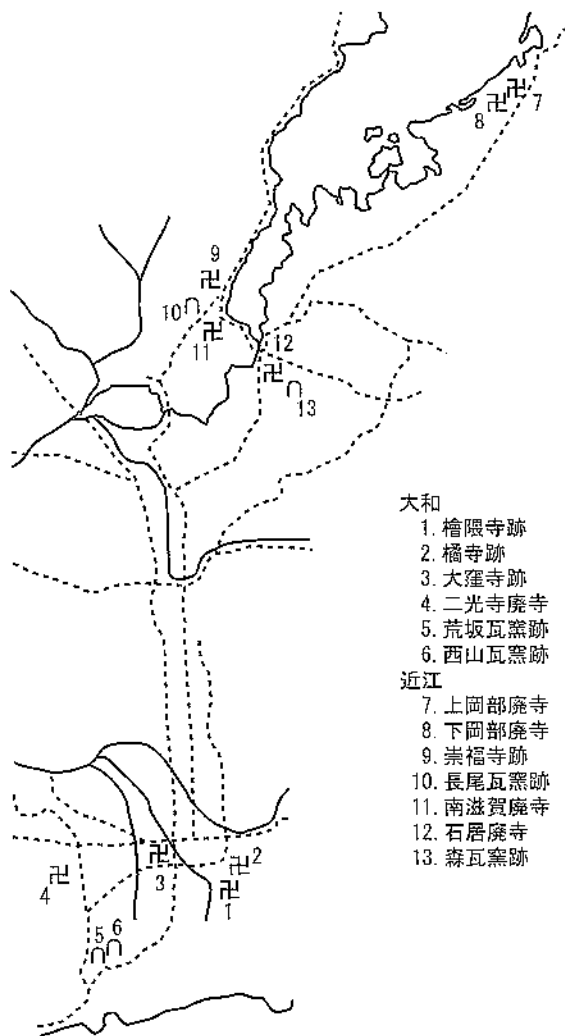


図2 檜隈寺式軒丸瓦出土遺跡の分布

れた可能性はあるものの、検出された伽藍遺構は7世紀後半代に創建された金堂等と、それに後続して藤原官期に建立された講堂や塔であったと推定されている。

蘇我本宗家が滅亡した乙巳変(645)後、不遇をかこった東漢氏が上述の朱鳥元年(686)以前において、こうした寺院を建立する時機を得たとするなら、それは壬申乱を経て同氏の「七つの不可」が叱責され許された天武六年(677)以降(『日本書紀』天武六年六月是月条)、天武十年(681)に書直智徳が小錦下の位を受けて連姓を賜り(天武十年十二月癸巳条)、翌年(682)には東漢氏一族が一括して直から連に改姓する如く(天武十一年五月甲辰条)、天武政権内において東漢氏が一定の地位を回復して行く時期をあげるほかない。また、藤原官期の講堂や塔の建立は、朱鳥元年(686)に封戸を得たことを契機として、寺観を整えたとみられる。

#### 檜隈寺式軒丸瓦

発掘調査での出土量比から判断すると、金堂創建時所用の軒瓦は軒丸瓦ⅡA型式と軒平瓦ⅡA型式の組み合わせで、垂木先瓦A・B型式や尾垂木先瓦もそれとともに用いられたとみられている。檜隈寺式軒丸瓦はこの軒丸瓦ⅡA型式を標式とするが、それとほぼ同紋の軒丸瓦ⅡB型式等も少数ながら出土している。

#### ⅡA型式

瓦当面径18cm余を測る。直立した外区平縁に輻線紋がめぐる複弁八葉蓮華紋で、蓮弁は花卉と間弁の両先端が接続し、照りむくりが強く中房周囲の彫り込みが顕著に深いという特徴がある。圏線のない中房には、円錐形に高く盛り上がる蓮子が周環をもって「1+8」に配置され、その二重目はほぼ中央界線に対応するように、賽目状に四角く並ぶ。瓦当裏面の中央には不定方向のナデ、外縁には削り、瓦当側面には木目痕が観察される。伽藍を使用したとみられる。接続する丸瓦部は無段式(行基式)で、接続箇所側面には縦位のナデと削りを施したのち、板状工具により叩き締める。瓦当裏面は全体にナデによって調整するとみられる<sup>24</sup>。

#### ⅡB型式

瓦当面径約20cm余を測る大型品である<sup>25</sup>。ⅡAときわめてよく似た瓦当紋様をもつことから、明らかにそれに系譜づけられる。ただし、その中房の2重目の蓮子は間弁に対応するように丸く並ぶので、ⅡAのように賽目状に四角く並ぶという蓮子配置は、輻線紋縁とともに檜隈寺式軒丸瓦を定義づける必要条件ではないことがわかる。つまり、檜隈寺式軒丸瓦を特徴づける最大の特徴は、花卉と間弁とが接続し、照りむくりが強く中房周囲の彫り込みが顕著に深いということにこそ認められる。

#### ⅡD型式

檜隈寺式軒丸瓦の特徴を、上述のような蓮弁の形状に見出すならば、ⅡD型式も檜隈寺式軒丸瓦と認められる。す

なわち、直立する外区平縁が素紋であること、圏線をもつ中房に、周環をもつ蓮子が「1+4+8」に配置されることは檜隈寺式軒丸瓦のなかでの変異と位置づけられる。また、中房蓮子の2重目と3重目が井桁状に並ぶことは、ⅡA型式のそれが賽目状に四角く並ぶことに系譜づけられるだろう。

#### 組み合う軒平瓦

出土量比からは軒丸瓦ⅡAと段顎式の三重弧紋軒平瓦ⅡAが組み合う。軒平瓦ⅡBも段顎式の三重弧紋で、金堂創建時所用瓦の可能性はある。ⅡBは少数しか知られないものの、段顎式の四重弧紋軒平瓦である。いずれにせよ、檜隈寺の檜隈寺式軒丸瓦には段顎式の押し挽き重弧紋軒平瓦が組み合うことが確実である。

#### (2) ⅡA型式同範軒丸瓦

大和における檜隈寺式軒丸瓦は、檜隈寺以外では6遺跡で出土している。そして、そのうちの4遺跡例が檜隈寺ⅡA型式同範軒丸瓦とみられている<sup>26</sup>。

#### 橘寺跡(高市郡賀美郷カ、高市郡明日香村)

檜隈寺跡の北東約2.9kmに位置し、北側に近接して川原寺跡がある。史料上の初見は『日本書紀』天武九年(680)四月乙卯条の尼坊焼失記事で、天平十九年(747)の『法隆寺伽藍縁起并流記資材帳』には「橘尼寺」とみえる。昭和28年(1953)以来の発掘調査の所見では、東向きの四天王寺式伽藍配置と推定されている。出土瓦からは、七世紀前半代の創建とみられるが、川原寺式軒瓦が大量に出土することから、僧寺の川原寺と対をなす尼寺として7世紀後半代に拡充整備されたとみられる。檜隈寺式軒丸瓦は『飛鳥白鳳の古瓦』所載の檜隈寺ⅡA型式踏似品<sup>27</sup>が知られるにすぎず、詳細は不詳である。

#### 大窪寺跡(高市郡久米郷、檜原市大久保)

檜隈寺跡の北北西約6.3kmに位置する。史料上の初見は『日本書紀』朱鳥元年(686)八月己丑条で、檜隈寺と軽寺・大窪寺に封戸を三十年に限って与えたとみえる。檜越は大窪史とされる。山田寺式、川原寺式、藤原官式軒瓦などといった出土瓦のうち、斜行する輻線紋を外区にめぐらす素弁蓮華紋軒丸瓦が最古型式とみられる。檜隈寺式軒丸瓦は檜隈寺ⅡA型式に踏似する小破片<sup>28</sup>が知られるにすぎず、詳細は不詳である。

#### 二光寺廃寺(葛上郡鴨上郷カ余戸郷カ、御所市西北窪)

平成16年(2004)の発掘調査で新発見された。檜隈寺の西約7.5kmに位置し、近傍には渡来氏族の墳墓とされる北窪古墳群(6世紀後半代)がある。発掘調査でみつかった「乱石積み二重基壇」上の瓦葺建物(5間×4間)であることから、金堂の可能性が高いとされる。金堂創建時所用の複弁蓮華紋軒丸瓦2型式は、それぞれ南約0.6kmに位置する朝妻廃寺出土瓦、および南西2.5kmに位置する高宮廃寺出土瓦と同範で、これらには偏向唐草紋軒平瓦が組み合うとみられる。埴仏にみえる紀年銘「甲午□五月中」は持統

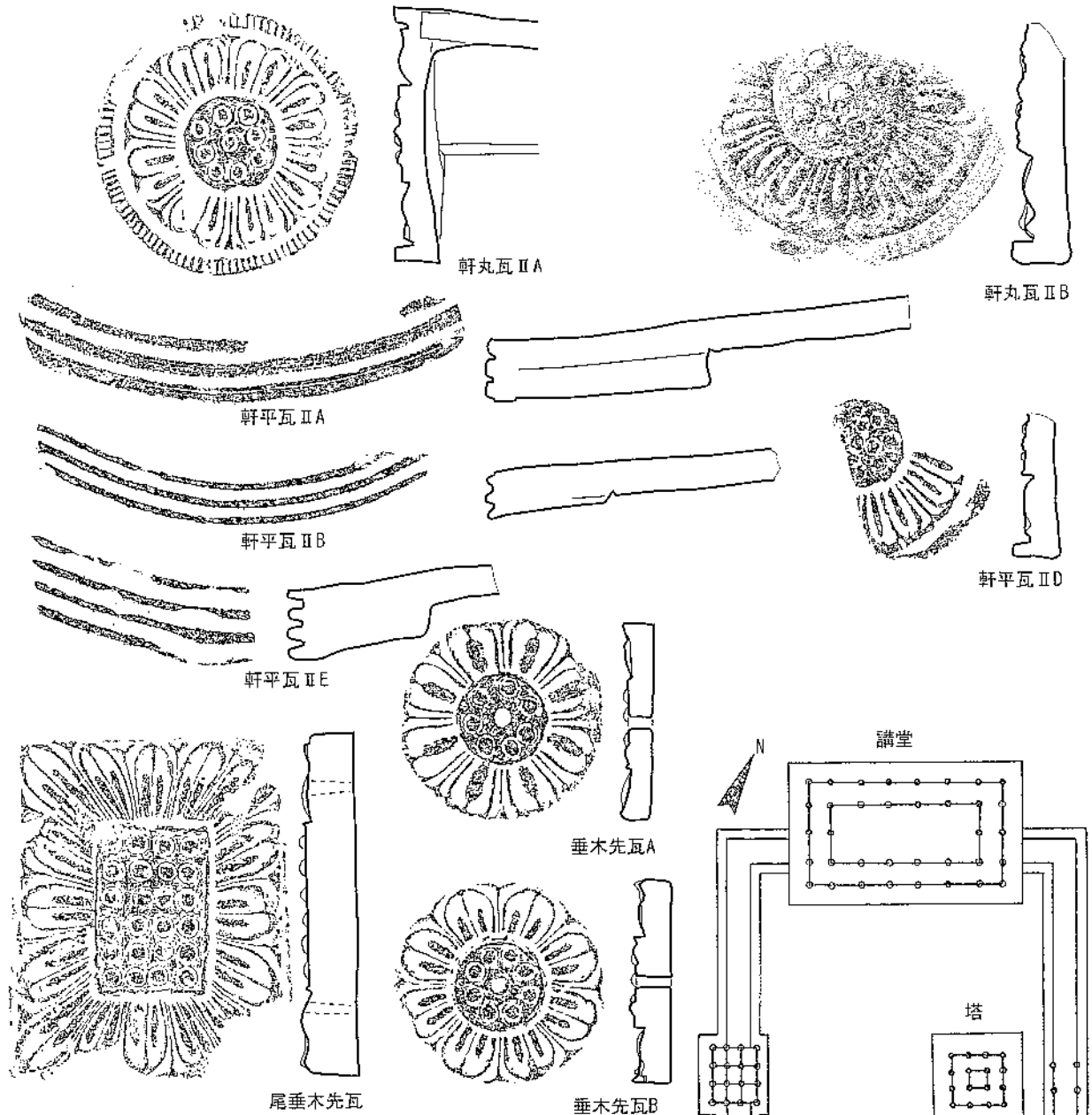
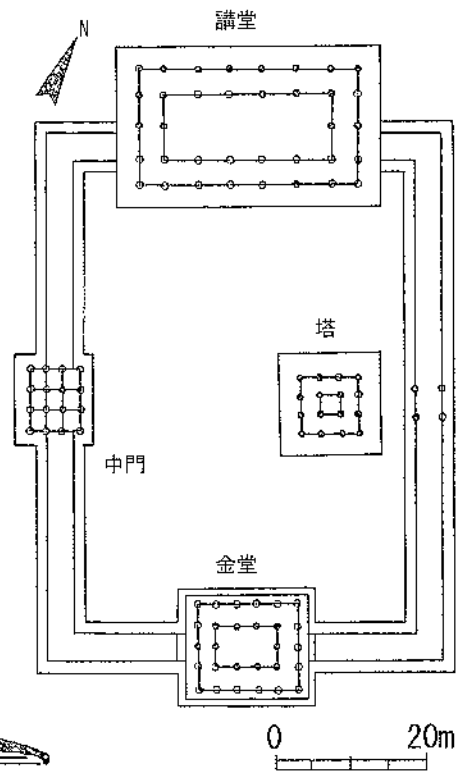


図3 檜隈寺金堂創建瓦 (S=1/4)  
伽藍配置模式図 (S=1/1,000)



註所引文献および参考・引用文献から  
作成 (断面実測図は再トレース)

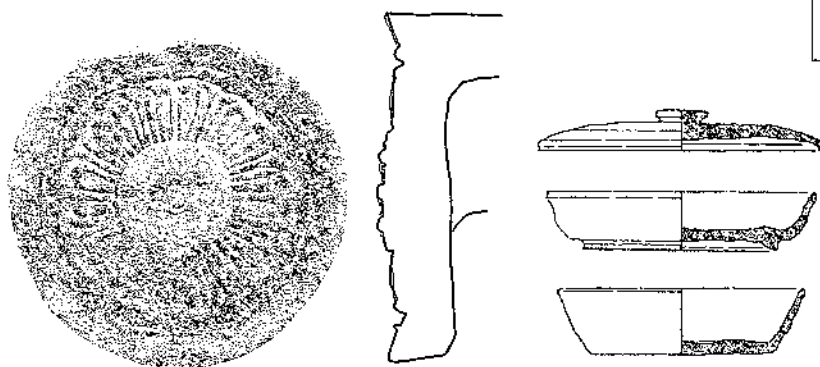


図4 荒坂瓦窯跡採集の軒丸瓦と須恵器 (S=1/4)

8年(694)と推定される。出土した檜隈寺式軒丸瓦は檜隈寺ⅡA型式同範でその数は少ない。

### (3) ⅡA型式に系譜づけられる軒丸瓦

檜隈寺ⅡA型式に系譜づけられる軒丸瓦が紀伊国境近くの2瓦窯跡で知られている。

#### 荒坂瓦窯跡群(宇智郡賀美郷、五條市西河内)

檜隈寺の南西約13.5kmに位置する。昭和8年(1933)の発掘調査によって4基の有段式管窯が確認され、昭和46年(1976)以降もしばしば小規模な発掘調査がおこなわれている。川原寺に創建時所用瓦を供給したことで知られるが、窯跡群からの採集品中に檜隈寺ⅡA型式に系譜づけられる軒丸瓦がある。斜縁に粗い凸鋸歯紋をめぐらせる複弁八葉蓮華紋がそれで、花弁と間弁の両先端が接続する蓮弁をもち、「1+8」の有周環蓮子の二重目が賽目状に四角く並ぶことがその系譜をよく示している。瓦当面径18cm余を測る。

なお、飛鳥Ⅲ期の須恵器が1号窯跡の焚口部から出土したほか、窯跡群からは同Ⅴ期の須恵器も採集されている。それぞれが示す時期は川原寺創建瓦と上述の軒丸瓦に対応するとみられる。

#### 西山瓦窯跡(宇智郡賀美郷、五條市住川町)

荒坂瓦窯跡の東約1.3kmに位置する。昭和46年に実施された遺跡近傍の発掘調査で、荒坂瓦窯跡例と同紋の軒丸瓦が出土している。

## 3. 近江の様相

### (1) 遺跡の概要

近江における檜隈寺式軒丸瓦は、愛知郡の2遺跡と滋賀郡の2遺跡、栗太郡の2遺跡で出土している。

#### 上岡部廃寺(愛知郡平流郷カ、彦根市上岡部町)

琵琶湖東岸域のなかほどの湖岸近くに位置する。小字名によって屋中寺廃寺とも呼ばれるが、現在この名称は下岡部廃寺を包括する遺跡名となっているので、ここでは用いない。遺跡近傍の地名「平流」は古代に遡る。天平勝宝三年(751)『近江国朔流村藝田地図』にみえる「朔流岡」などがそれであり、弘福寺領平流荘はこの付近に比定される。『和名抄』愛知郡に「平流郷」の記載はないものの、野洲市西河原森ノ内遺跡出土木簡には「衣知評平留五十戸且波博士家」とみえる。且波博士(大友丹波史)は東漢氏配下の志賀漢人の一族である<sup>8)</sup>。上岡部廃寺や近接する下岡部廃寺は、彼ら志賀漢人一族を檀越として創建、運営されたと推定される。

昭和初期の耕地整理の際、大型の柱根や大量の瓦が出土し、法隆寺式伽藍配置をもつ古代寺院跡の存在が想定された。しかしながら、平成5・9年(1993・1997)の発掘調査では寺院関連遺構は検出されず、瓦の出土量もごく少なかった。

檜隈寺式軒丸瓦は3351Aと3321Aが1点ずつある。山崎

分類のⅠ型式にあたる素弁蓮華紋軒丸瓦1321Abが1点あり、それと同範の素紋縁軒丸瓦1321Aaも1点がある。これらはいずれも昭和初期の採集品であるが、おむね下岡部廃寺のそれとの混乱はないとみてよい。軒平瓦は段顎式三重弧紋軒平瓦1点が採集されているほか、発掘調査品中に段顎式の四重弧紋軒平瓦2点があり、このうちの1点については簾状重弧紋軒平瓦の可能性はある。

#### 下岡部廃寺(愛知郡平流郷、彦根市上岡部町)

上岡部廃寺の西側約600mに位置する。遺跡北側の曾根沼付近は東大寺領朔流荘の比定地で、天平勝宝三年(751)『近江国朔流村藝田地図』に「大村寺田」とみえることから、小字「大村」にある下岡部廃寺こそ、地名をもって「大村寺」と呼ばれたと推定されている<sup>9)</sup>。

昭和初期の耕地整理の際、大量の瓦が出土した。そして平成6・8年(1994・1996)の発掘調査では寺院関連遺構は検出されなかったものの、数多くの瓦が出土した。発掘調査で出土した檜隈寺式軒丸瓦には3311Aが1点、3351Aが3点、3381Aが3点、未詳種1点がある。また、昭和初期に採集された檜隈寺式軒丸瓦には3351Aが1点、3321Aが1点、3322Aが1点ある。採集地不詳の3311A1点もいちおう下岡部廃寺の出土品と見てよいだろう。また、瓦当紋様および製作手法の関連から、川原寺式軒丸瓦3131Aの存在も注目される。発掘調査で出土した軒平瓦には、曲線顎式四重弧紋軒平瓦3点のほか、段顎式四重弧紋軒平瓦2点を含む段顎式重弧紋軒平瓦3点などがある。

#### 南滋賀廃寺(滋賀郡錦部郷、大津市南志賀一丁目ほか)

南滋賀廃寺は推定大津宮跡(史跡近江大津宮織織遺跡)のすぐ北側に位置する。恵美押勝(藤原仲麻呂)乱後の報償記事にみえる「錦部寺」に比定し(『続日本紀』天平神護二年(776)九月己未条)、志賀漢人の一族・錦部村主を檀越とみる説がある<sup>10)</sup>。

昭和3・13年(1928・1938)に大津宮跡究明の一環として発掘調査が実施され、昭和32年(1957)の史跡指定以降は現状変更にかかる発掘調査がしばしば実施されている。調査の結果、当初は薬師寺式伽藍配置と見られていたが、現在は川原寺式伽藍配置であろうと考えられている。すなわち金堂の南側に小金堂(西金堂)と塔とが東西に並列し、それを金堂から延びた回廊が四面をかこんで、南に中門が開く。金堂の北には講堂があり、その三面を僧坊がかこむと推測されている。伽藍中軸線は大津宮跡のそれと一致するわけではないが、方位はそれとほぼ同様の正南北方位を指す。なお、講堂は石積基壇ながら、金堂・小金堂・塔は渡来氏族とむすびつくという瓦積基壇である。

おそらく有軸素弁蓮華紋軒丸瓦を用いて創建された後、大津宮期以降に川原寺式軒瓦を加えて、その維持管理がはかられたのだろう。檜隈寺式軒丸瓦3341Aは少数しか知られないことから、補修用と見なされる。段顎式四重弧紋軒平瓦が出土している。

崇福寺跡（滋賀郡大友郷カ、大津市滋賀里）

崇福寺跡は大津市滋賀里の山中に所在する。平安時代後期の『扶桑略記』所引の『崇福寺縁起』によると、天智七年（668）に大津宮の乾方山中に瑞祥を見た天智天皇の勅願によって造営がはじまったという。史料上の初見は、持統三（689）もしくは四年（690）とされる『万葉集』巻二の但馬皇女の詞書きで、それにみえる「近江の志賀の山寺」に比定される。崇福寺の法号のほか、地名をもって志賀山寺・志賀寺などとも呼ばれていた。『続日本紀』大宝元年（701）八月甲辰条には、「庚子年」（文武四年・700）から30年間に限って「志我山寺」に寺封が与えられたと見え、その満期後には「紫郷山寺」が官寺に列せられている（『続日本紀』天平元年（729）八月甲辰条）。

主要伽藍は谷川によって隔てられた三尾根上にある。北尾根には弥勒堂、中尾根には西に小金堂、東に塔とされる礎石建物が並ぶ。南尾根には西に金堂、東の北に経蔵、東の南に講堂とされる礎石建物が並ぶ。伽藍はほぼ正東西方位を指すが、方位のやや異なる南尾根の伽藍は、桓武天皇の創建した梵釈寺跡とされる（『続日本紀』延暦元年（786）正月壬子条）。なお、北尾根の弥勒堂にみえる瓦積基壇は、天智二年（663）の白村江戦後に大挙渡来した百濟人にかかわり、大津宮周辺の官寺での採用を嚆矢として各地に展開したとみられている<sup>86</sup>。

昭和3・13年（1928・1938）に大津宮跡究明の一環として発掘調査が実施されている。出土瓦が少なかったことから、創建当初は『扶桑略記』が記すような檜皮葺き葺棟の建物であったとの説もあるが<sup>87</sup>、遺物が集中するであろう谷斜面地には調査が及んでいない。瓦葺建物の創建瓦は天智代とみられる川原寺A種同範軒丸瓦で、製作技法は大津廃寺所用瓦と類似する。檜隈寺式軒丸瓦と紀寺式軒丸瓦とはその後の補修瓦とみられ、前者は南滋賀廃寺3341Aと同範であり、後者は山城北白川廃寺同範瓦とみられている<sup>88</sup>。おそらく天武元年（672）の壬申乱後、崇福寺が官営寺院としての援助を得られなかった時期には、北白川廃寺や南滋賀廃寺の檀越たちが知識として、それらの寺院の資材を流用施入し維持管理したのだろう。

なお、梵釈寺創建瓦を焼成した長尾瓦窯跡からも、構築材として再利用されたい檜隈寺式軒丸瓦3341Aが出土している。

石居廃寺（栗太郡、大津市田上石居町）

石居（いしずえ）廃寺は大津市石居町地先に所在する。琵琶湖の南端から注ぎ出る瀬田川の東岸に位置し、それに流入する大同川下流域の小盆地内北部域に立地する。『万葉集』巻一の藤原宮役民の作る歌に詠まれたように、当地の田上山で伐採された檜材は筏にして大同川から瀬田川・宇治川・木津川を経て藤原宮造営地まで運漕されていった。また、正倉院文書には石山寺の増改築に伴って、天平宝字六年（762）に檜皮や雑材などを供給していたことが見え、

その拠点としての「田上山作所」などが類出する。前代の遺跡が乏しい地域に石居廃寺が建立された背景には、国家規模のこうした地域開発が重要な役割を果たした可能性が高い。木材加工に直接かかわる技能民のほか、柚山・川津および物流体制の管理運営に長じた人々が配置されたのだろう。このことについては栗太郡の郡領氏族でもある小槻山君の関与が推測されるが、直接的な実務をになった人々は磐城村主・大友日佐・上村主・志何史などといった志賀漢人一族であった可能性が高い。石居廃寺の檀越についても、いちおう彼ら一族が有力な候補となるだろう。なお石居廃寺を「田上報恩寺」（『吾妻鏡』建久元年（1190）五月十日条）に比定する説もある。

石居の地名は、礎石の露出した基壇がふるくから知られていたことに由来するという。本格的な発掘調査は実施されていないが、大正末期頃以降の測量調査等の結果、この基壇は正南北方位を指す金堂と認識され、採集品等の紹介もおこなわれている。出土する軒丸瓦は今のところ檜隈寺式3361Aとその退化型式3362Aのみで、それらには段顎式四重弧紋軒平瓦7341Cなどが組み合うとみられる。

森瓦窯跡（栗太郡、田上森町）

森瓦窯跡は石居廃寺の東北約600mの大同川沿いの山斜面地に所在する。向畑瓦窯跡とも呼ばれる。昭和35年（1936）の道路工事を契機に複数の瓦窯跡が見つかったらしく、工事中の崖面に登窯とみられる断面も観察されている。石居廃寺と同範の檜隈寺式軒丸瓦3361Aが採集されている<sup>89</sup>。石居廃寺に創建瓦を供給したとみられる。

（2）軒丸瓦の様相

3311型式A種

瓦当面径は17cm余を測る。外区の内縁は斜縁に面違鋸歯紋をめぐらし、外縁は平縁に幅線紋をめぐらせる。複弁八葉蓮華紋で、間弁の両先端が花卉に接続する。中房には圍線があって、周環をもつ蓮子を「1+5+9」に丸く配置する。瓦当部と丸瓦部との接続は接合式で、指頭によって瓦当裏面を細長く円弧状にくぼませ、そこに丸瓦部を接続している。瓦当裏面の下半部周縁に粘土紐を貼り付けて凸帯をつくる。焼成はややあまく、色調は灰褐色を呈す。下岡部廃寺で1点が出土し、下岡部廃寺もしくは上岡部廃寺から1点が採集されている。

3321型式A種

瓦当面径は17cm弱を測る。外区は直立する素紋の平縁である。複弁八葉蓮華紋で、間弁の両先端が花卉に接続する。中房には圍線があって、周環をもつ蓮子を「1+5+9」に丸く配置する。瓦当部と丸瓦部との接続は接合式とみられる。瓦当裏面が平坦な個体と、その下半部周縁に粘土紐を貼り付けて凸帯をつくる個体とがある。焼成はややあまく、色調は灰色を呈す。上岡部廃寺と下岡部廃寺から、それぞれ1点づつが採集されている。

### 3322型式A種

瓦当面径は18cm余を測る。外区は直立する素紋の平縁である。複弁八葉蓮華紋で、間弁の両先端が花卉に接続するとみられる。圏線のないらしい中房に、周環のない蓮子17個を配置する。蓮子配置は一見したところ三重構成のように見えるが、中心蓮子をもたず井桁状に配置される。瓦当部と丸瓦部との接続は接合式とみられる。瓦当裏面は平坦である。下岡部廃寺から1点が採集されている。

### 3341型式A種

瓦当面径は19cm余を測る。直立する外区平縁には幅線紋をめぐらせる。複弁八葉蓮華紋で、間弁の両先端が花卉に顕著に接続する。圏線のある中房には、周環のない蓮子を「1+4+8」の井桁状に配置するほか、方形の凹部が四箇所に必ず認められる。これは内区部分の瓦範と外区部分の瓦範とを組み合わせた連結具痕(釘頭痕)とみられる。外区平縁が高く直立するため、こうした組み合わせ式の瓦範が用いられたのだろう<sup>94</sup>。

瓦当部と丸瓦部との接続は類例のない接合式である。すなわち瓦範に粘土を詰め込む際、まず中房部分に粘土円盤を詰め込み、その上から内区部分に相当する粘土円盤を重ね合わせる。ついで、すでに詰め込んだ内区部分の粘土に、外区部分の厚みをもつ粘土板を立てて巻き付けたあと、瓦当裏面に生乾きの丸瓦部を立て接合用粘土を補足する。瓦当裏面の調整具合によって、その下半部周縁に外区の粘土板に由来する凸帯の目立つ個体ができることがある<sup>95</sup>。焼成は堅緻で、色調は赤褐色を呈す。南滋賀廃寺で6点と崇福寺で4点、長尾瓦窯跡で1点が出土している。南滋賀廃寺には範傷③がある個体とない個体の両方が知られるものの、崇福寺と長尾瓦窯跡にはいまのところ範傷③がある個体しかない<sup>96</sup>。

### 3351型式A種

瓦当面径は17cm余を測る。複弁八葉蓮華紋で、間弁の両先端が花卉に接続する。圏線のない中房に、周環をもつ蓮子を「1+7」に丸く配置する。外区はやや内傾した平縁で、幅線紋をめぐらせる。瓦当部と丸瓦部との接続は接合式である。瓦範に粘土を詰める際、まず中房部分に粘土円盤を詰め込んでいることがわかる。瓦当裏面が平坦な個体と、その下半部周縁に粘土紐を貼り付けて凸帯をつくる個体とがあるものの、後者についてはいまのところ外区を欠落する個体しかない。焼成はややあまく、色調は灰色ないし灰褐色を呈す。上岡部廃寺と下岡部廃寺でそれぞれ1点づつが採集され、下岡部廃寺から2点が出土したほか、上岡部廃寺もしくは下岡部廃寺からの採集品1点がある。

### 3361型式A種

瓦当面径は約20cmを測る。複弁八葉蓮華紋で、間弁の両先端が花卉に顕著に接続する。圏線のない中房に、周環のある蓮子を「1+8」に丸く配置する。二重目の蓮子は間弁に対応して配置されるものの、中心蓮子からの距離が不

規則な蓮子を含むため、5個と3個が分離しているようにみえる。外区は平縁であって、瓦範に粘土を詰め込む際、この部分には紐状の粘土を詰め込んでいることがわかる。瓦当部と丸瓦部との接続は接合式である。瓦当裏面は平坦である。焼成は堅緻ないしややあまく、色調は青灰色ないし灰色を呈す。石居廃寺で13点が、森瓦窯跡で2点が採集されている。

### 3362型式A種

瓦当面径は約17cmを測る。隣接する蓮弁相互が接続するため、細弁十六葉蓮華紋のようにもみえるが、三角形の間弁が複弁八葉蓮華紋の形状を保っている。圏線のない中房に、周環のある蓮子を「1+6」に丸く配置する。外区は平縁である。瓦当裏面は平坦である。焼成は堅緻で、色調は青灰色を呈す。石居廃寺で2点が採集されている。

なお、3362Aは中房部のみ破片と、それを欠く蓮弁部等の破片であって、両者は接合しない。厳密に言えば、これをもって同種とは認定できないが、ここでは暫定的にこれまでの報告に従っておく。

### 3381型式A種

瓦当面径は約17cmを測る。複弁八葉蓮華紋で、間弁の両先端が花卉に接続する。圏線のない中房に、周環のない蓮子を「1+8」の方形状に配置する。外区は幅狭の平縁であって、瓦範に粘土を詰め込む際、この部分には紐状の粘土を詰め込んでいることがわかる。瓦当部と丸瓦部との接続は接合式で、指頭によって瓦当裏面を細長く円弧状にくぼませ、そこに丸瓦部を接続している。瓦当裏面が平坦な個体と、その下半部周縁に粘土紐を貼り付けて凸帯をつくる個体とがある。焼成はおおむね堅緻で、色調は淡橙色を呈す。下岡部廃寺から3点が出土している。

### 未詳種

複弁八葉蓮華紋とみられる。間弁の両先端が花卉に接続する。圏線のない中房に、周環のない蓮子を「1+8」に丸く配置するとみられる。焼成は堅緻で、色調は灰色を呈す。下岡部廃寺から1点が出土している。

### 組み合う軒平瓦

近江の檜隈寺式軒丸瓦のうち、組み合う軒平瓦がほぼ判明する例は、いまのところ石居廃寺3361Aしかない。ここでは、この軒丸瓦と段頸式四重弧紋軒平瓦7341C等しか知られないからである。そして、檜隈寺式軒丸瓦と段頸式の重弧紋軒平瓦の組み合わせは檜隈寺でも確認できるから、そうした視点でながめると、上岡部廃寺・下岡部廃寺・南滋賀廃寺・崇福寺でも段頸式の四重弧紋軒平瓦が出土し、上岡部廃寺では段頸式の三重弧紋軒平瓦も出土することが注意される。下岡部廃寺では軒丸瓦の出土数と較べて軒平瓦のそれが少なく、様相は複雑であるものの、近江でも檜隈寺式軒丸瓦には段頸式を中心とした重弧紋軒平瓦が組み合うことはほぼ確実と見てよいだろう。



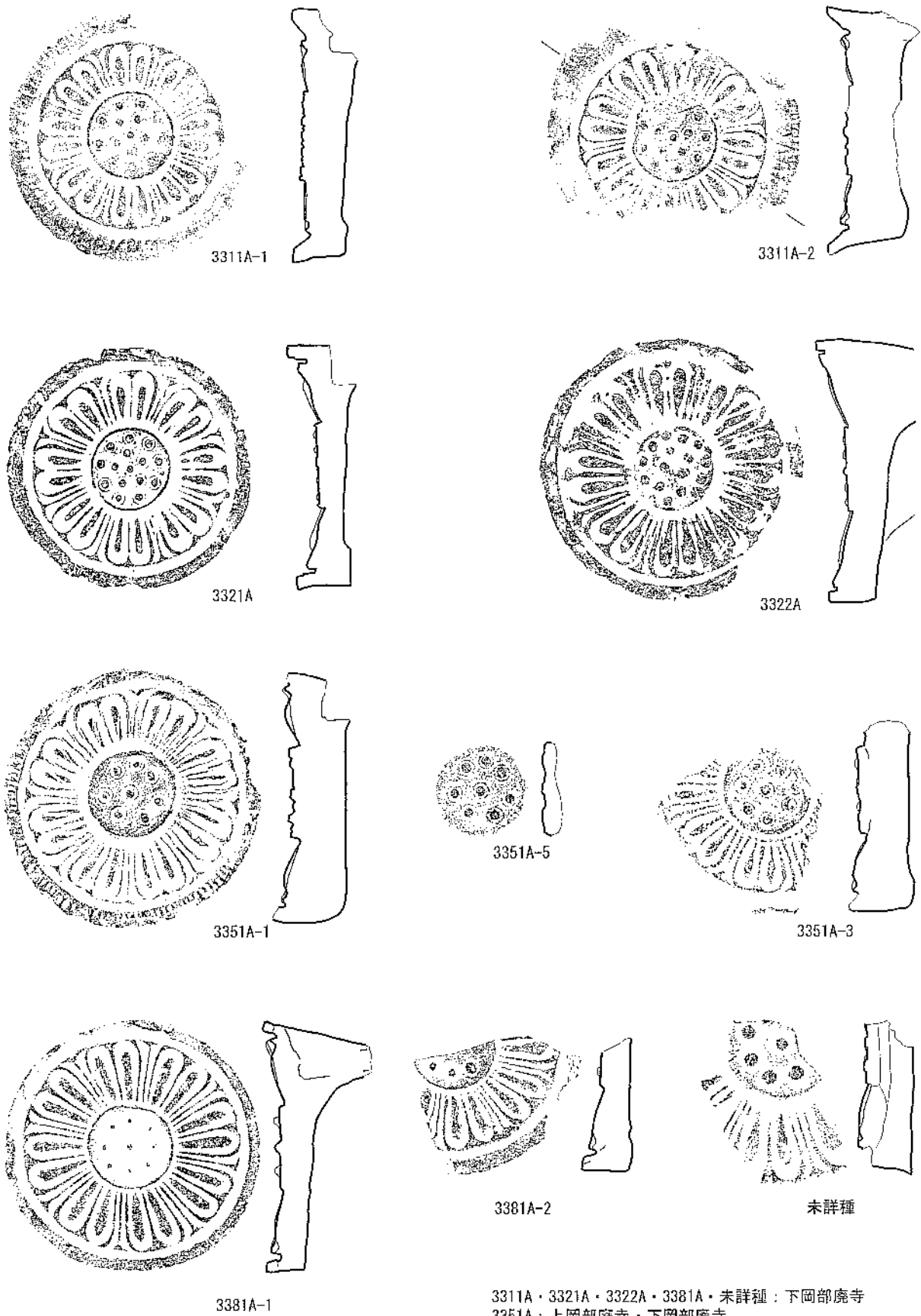
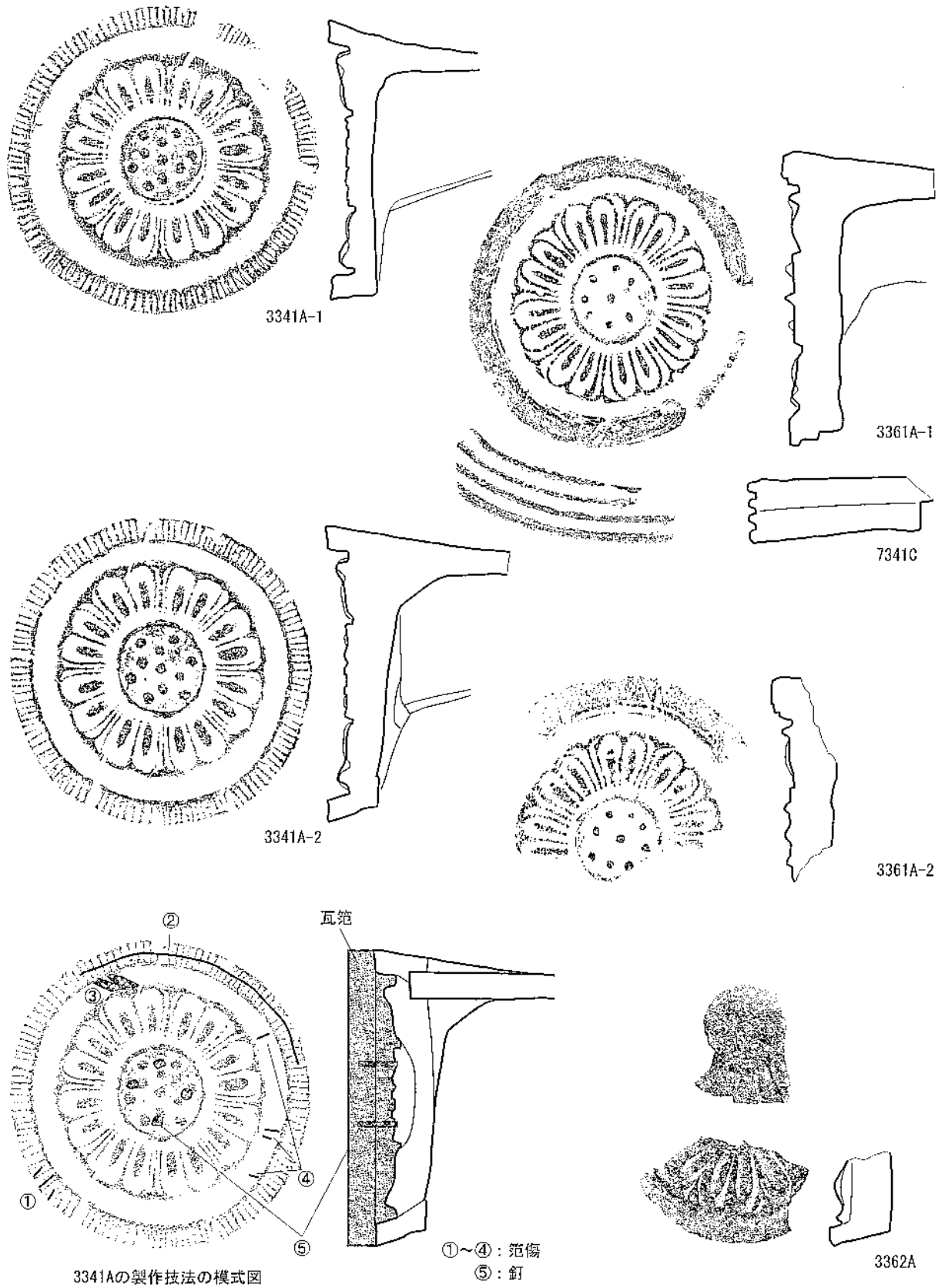


図5 近江・愛知郡の檜隈寺式軒丸瓦 (S=1/4)

註所引文献および参考・引用文献から作成 (断面実測図は再トレース)



3341Aの製作技法の模式図

①～④：范傷  
⑤：釘

3341A：南滋賀鹿寺・崇福寺・長尾瓦窯跡

3361A：石居鹿寺・森瓦窯跡、7341C：石居鹿寺・森瓦窯跡、3362A：石居鹿寺

図6 近江・栗太郡の檜隈寺式軒丸瓦と重弧紋軒平瓦 (S=1/4)

註所引文献および参考・引用文献から作成 (断面実測図は再トレース)

4. 瓦当紋様の成立と展開

II A型式とII B型式

檜隈寺式軒丸瓦は檜隈寺II Aを標式とする。檜隈寺II Bはそれと瓦当紋様の要素と構成とがほぼ等しいから、型式学では両者はほぼ同時に存在したと見なすことができる。そして、檜隈寺式軒丸瓦の初現がII Aであるならば、その瓦当紋様は金堂創建時において、II Bとも深くかかわってあたらしく創作されたことになる。II AとII Bとをこうした視点で金堂創建時所用瓦のなかに位置づけると、中房が窮屈に感じるほどに大きい有周環蓮子が、II Aについては円錐形に高く盛り上がって賽目状に四角く並び、II Bについてはそれほど盛り上がらずに丸く並ぶという特徴が認められる。そして、そのそれぞれは尾垂木瓦と垂木先瓦Bの中房および蓮子の特徴に一致することがわかる。ただし、両者に共通する「1+8」という中房の蓮子配置は垂木先瓦Bにしか見えないから、まずはII Bがこれを模倣して成立し、ついでII Aが尾垂木瓦の影響を受けてそれを賽目状に四角く変化させたと推定できる。II B→II Aという変遷の順序は、II Bにはあった中房圓線がII Aでは消失していること、尾垂木瓦は垂木先瓦Bの存在を前提として、それを方形デザイン化した瓦当紋様をもつことによっても支持される。檜隈寺ではII Bが最初に成立しながら少数にとどまり、やや遅れて成立したII Aが多数を占めた理由としては、II Aが瓦当径約18cm余に対して、II Bが瓦当径20cm余の大型品で、その用途が限られていたことにかかわると推測される。

原型としての3311A型式

檜隈寺II Bは大和では最古の檜隈寺式軒丸瓦とみられるが、同地にはその瓦当紋様を創出するにあたってのモデルとなるような軒丸瓦は見出しがたい。すなわち、大和に分布する複弁蓮華紋軒丸瓦のなかには、花卉と間弁とが接続するといった特徴や、照りむくりが強くて中房周囲の彫り込みが顕著に深いという特徴をもった例は、檜隈寺式軒丸瓦以外には見あたらない。また、輻線紋縁についても、大

塚寺の山崎I型式軒丸瓦にそれを見出せるものの、同例は瓦当面の中心を指さない斜行する輻線紋であることから、檜隈寺式軒丸瓦のそのモデルであるとは見なしがたい。

大和のこうした状況に対して、近江には檜隈寺式のモデルと見なせる軒丸瓦がある。下岡部廃寺3311Aがそれである。斜縁に面連鋸歯紋縁をめぐらせる複弁8葉蓮華紋で、中房の蓮子は周環を有して「1+5+9」に配置されるから、一見すると川原寺式軒丸瓦の如くである。しかしながら、その外区外縁には輻線紋のある平縁が付き、花卉と間弁とが接続する蓮華紋は、照りむくりが強くて中房周囲の彫り込みが顕著に深いという、檜隈寺式軒丸瓦の特徴を備えている。そして、3311Aのこうした瓦当紋様が創出されたことについても、下岡部廃寺とその近傍の上岡部廃寺のなかで説明がつく。つまり、下岡部廃寺3313Aは3311Aに先行する特徴をもつ川原寺式軒丸瓦で、両者は瓦当裏面の下半部周縁に粘土紐を貼り付けて堤状の凸帯をつくるという製作技法によっても系譜づけられる。そして、輻線紋縁については、上岡部廃寺に山崎I型式軒丸瓦1321A bがある。これは1321A aの素紋縁の瓦范に輻線紋を彫り加えて作られたとみられるから、川原寺式軒丸瓦3131Aに輻線紋縁を付加して3311Aの瓦当紋様を創出する素地が、上岡部廃寺・下岡部廃寺にあったと理解することができる。そして、花卉と間弁とが接続する独特な蓮華紋の発生理由は明確でないものの、そうした特徴をもつ3321Aが素紋縁で、かつ中房蓮子が3重構成というII Bにはない瓦当紋様をもつことは、少なくともこれがII Bに系譜づけられる要素ではないと推定できる。

成立の過程

檜隈寺式軒丸瓦の原型は近江の下岡部廃寺3311Aとみられる。ただし、檜隈寺II Aの完成度の高さを考慮すると、II Aが3311Aを直接のモデルとして成立したとみるには、型式学上の連続性を欠いて飛躍がある。そうした場合、上岡部廃寺・下岡部廃寺には檜隈寺II Bとほぼ同紋の軒丸瓦のあることが注目される。3351Aがそれで、II Bの瓦当紋

表 檜隈寺式軒丸瓦の計測値と瓦当紋様比率

	瓦当径	内区径	外区幅	蓮弁長	中房径	外区比率	蓮弁比率	中房比率
型式	X	Y	a	b	c	2a/Y	2b/Y	c/Y
3131A	18.5	14.0	2.2	3.6	6.8	31%	51%	49%
3311A	17.4	13.1	1.8	3.5	6.1	27%	53%	47%
3321A	17.1	14.8	0.7	4.3	6.2	9%	58%	42%
3341A	19.5	14.7	1.9	4.1	6.5	26%	56%	44%
II D	18.8	16.0	1.0	4.5	7.0	13%	56%	41%
3322A	18.2	15.7	1.0	5.2	5.3	13%	66%	34%
3351A	17.2	14.4	1.0	4.1	6.2	14%	57%	43%
II B	20.4	17.3	1.1	4.7	7.9	13%	54%	46%
3361A	20.0	15.7	2.3	4.6	6.5	29%	59%	41%
3362A	14.4	11.8	1.3	4.3	3.2	22%	73%	27%
II A	18.6	16.8	1.0	4.6	7.6	12%	55%	45%
3381A	17.4	16.0	0.9	4.8	6.4	11%	60%	40%
荒坂瓦窯跡群例	18.1	13.0	0.9	3.3	6.4	14%	51%	49%

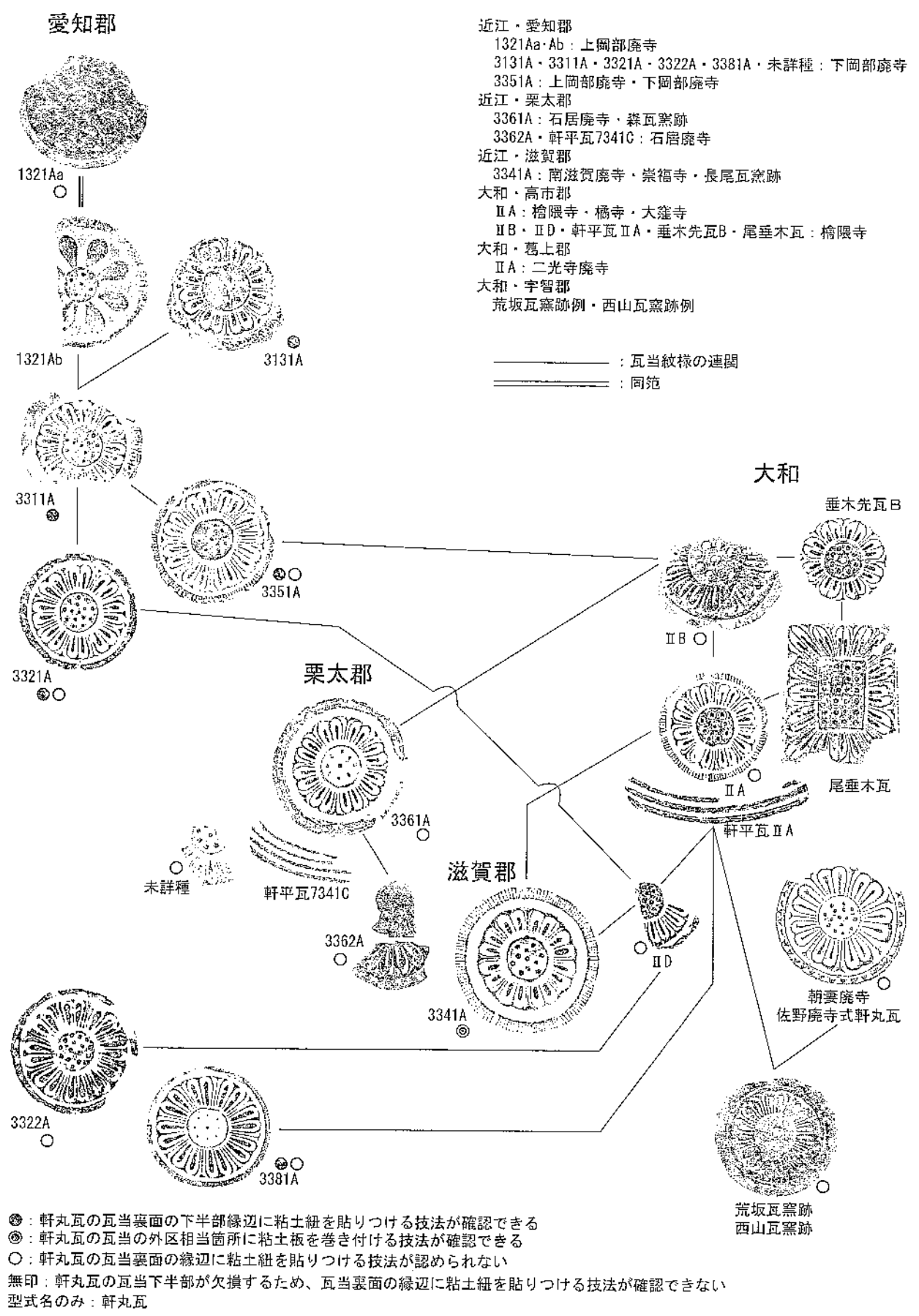


図7 檜隈寺式軒丸瓦の系譜 (S=1/4)  
註所引文献および参考・引用文献から作成 (断面実測図は再トレース)

様と較べると、中房の蓮子が小さく、その配置も「1+7」で2重目の1個が少ないから、一見すると3351AはⅡBの退化型式の如くである。しかしながら、蓮子が隙間のないほど中房に並ばないことや、その二重目が奇数個配置であることは、ⅡBよりも3311Aに近い特徴をもつと言える。そうした視点でながめると、3351Aの瓦当面径は17cm余で、同20cm余のⅡBとの懸隔は大きいものの、3311Aのそれとはほぼ同大であることが知られる。加えて、3351Aの一部には瓦当裏面に凸帯が認められるなど、製作技法も3311Aに系譜づけられるので、3351AはⅡBよりもむしろ3311Aとの近縁性がつよいとみられる。つまり、檜隈寺式軒丸瓦の原型を3311Aと認めるならば、まずは3311Aから面邊鋸歯紋縁が欠落し、中房蓮子が2重構成化するという瓦当紋様の退化のなかで3351Aがあらわれ、ついで檜隈寺金堂の創建にあたってその瓦当紋縁が採用されるにおよび、垂木先瓦Bの中房を模してⅡBが成立し、やや遅れて尾垂木瓦の中房を模してⅡAが成立したと推定できる。

#### 展開の諸相

ⅡBに系譜づけられる軒丸瓦としては、まず石居廃寺・森瓦窯跡3361Aがあげられる。3361Aは素紋縁であることを除いて、ⅡBとよく似た瓦当紋縁をもち、瓦当面径も20cmをこえる大型品であるものの、中房比率が小さく、中房の周縁もない。下岡部廃寺の未詳種も中房の2重目の蓮子が丸く並ぶので、ⅡBに系譜づけられるが、中房に周縁がないので、3361Aよりもさらに後出するとみられる。石居廃寺3362Aは、隣接する花卉が接続し、間弁は三角形に退化している。また、中房の蓮子に周縁はあるものの、その配置は二重目の2個が減じて6個になり、中房比率もいちじるしく小さい。3361Aの退化型式とみられる。

ⅡAに系譜づけられる軒丸瓦としては、下岡部廃寺3381Aと荒坂瓦窯跡群・西山瓦窯跡例があげられる。中房の2重目の蓮子が方形に並ぶことが、その系譜をよくあらわしている。前者については素紋縁で、中房比率もⅡAに較べて小さく、蓮子の周縁もないから、ⅡA退化型式と認められる。後者については、斜縁の凸鋸歯縁が佐野廃寺式軒丸瓦に由来するとみられる。佐野廃寺式は紀伊を中心に分布するほか、大和の朝妻廃寺でも出土している<sup>5)</sup>。朝妻廃寺はⅡA同範軒丸瓦を出土した二光寺廃寺とも関係が深いので、荒坂瓦窯跡群等例はこれらの寺院とのかかわりのなかで創作されたと推測される。

素紋縁の下岡部廃寺3321Aは、中房蓮子が3重構成であるから、下岡部廃寺3311Aに系譜づけられる。そして、檜隈寺ⅡDは3321Aとはほぼ同縁ながら、中房蓮子が井桁状に四角く並ぶという点でⅡAに系譜づけられる。南滋賀廃寺・崇福寺・長尾瓦窯跡3341Aは輻線紋縁であるものの、中房の蓮子配置はⅡDと同じである。中房に周縁を欠くことを考慮すると、3341Aの瓦当紋縁はおそらくⅡDを主要なモデルとして、それにⅡAの輻線紋縁を採用してつくら

れたと推定される。3322Aは中房の中心蓮子を欠くが、その配置は井桁状を示す。素紋縁であることを考慮すると、直接的にはⅡDに系譜づけられるだろう。

#### 年代の推定

下岡部廃寺の檜隈寺式軒丸瓦には、瓦当裏面の下半部周縁に粘土紐を貼り付けて、凸帯をつくる個体が多い。こうした製作技法が認められる軒丸瓦は犬上郡・愛知郡を中心とした近江湖東北部地域に顕著に分布するという特徴をもち、その初現は下岡部廃寺3131Aの川原寺式軒丸瓦とみられる<sup>6)</sup>。3131Aは当該地域で最古式の川原寺式軒丸瓦であって、それにみられる瓦当裏面の凸帯は川原寺創建時所用軒丸瓦が瓦当裏面をスプーン状の工具で彫りくぼめ、その下半部周縁に提状の凸帯をつくることに由来すると見られる。瓦当下顎部が傾斜するという3311Aの特徴も、川原寺創建時所用軒丸瓦の模倣とみられるので、以上の想定は蓋然性は高いと考えられる。川原寺の創建が斉明没後(661)、大津遷都(667年)以前の660年代とすれば、その瓦当紋縁と製作技法を模倣した下岡部廃寺の川原寺式軒丸瓦は、それからややくだる670年代前半頃の所産と想定できる。そして、このことは当該地域に分布する在地性のつよい湖東式軒瓦についての知見からも裏付けられる。すなわち、瓦当裏面に凸帯をつくるという製作技法は、湖東式軒丸瓦の最古型式にはまったく認められず、それに継続する型式になってはじめて一般化するということである。湖東式軒瓦の出現は663年の朴市秦造田来津の白村江戦での活躍と関連づけられるから、この製作技法は湖東式軒丸瓦の初現期とみられる660年代後半から670年代初頃までの時期には、当該地域に存在しなかったことがわかる<sup>7)</sup>。したがって、下岡部廃寺3131Aに後出する下岡部廃寺3311Aは670年代前半を廻り得ず、かつそれは檜隈寺式軒丸瓦の原型とみられるから、その退化型式として派生した下岡部廃寺3351Aは670年代でも後半の所産と考えられる。

一方、檜隈寺は『日本書紀』朱鳥元年(686)八月己丑条にみえるから、創建はそれ以前であったことが知られる。蘇我本宗家が滅亡した乙巳変(645)後、不遇をかこった東漢氏が686年以前において、こうした寺院を建立する時機を得たとするなら、それは同氏の「七つの不可」が叱責され許された677年以降(『日本書紀』天武六年六月是月条)のことで、東漢氏が天武政権内において一定の地位を回復して行く時期をあげるほかないだろう。つまり、檜隈寺金堂の創建瓦として軒丸瓦ⅡBやⅡAがつくられた時期は677年以降で686年以前のことと考えられる。おおむね680年前後の時期と見てよいだろう。

南滋賀廃寺・崇福寺3341Aについては、崇福寺が官営寺院としての援助を得られなかった壬申乱(672)後の時期に、南滋賀廃寺の檀越がその資材を崇福寺に流用施入したことを示すと考えるなら、3341Aは崇福寺に寺封が与えられた700年(『続日本紀』大宝元年八月甲辰条)以前の所産と推

定できる。荒坂瓦窯跡群例についても、採集された須恵器からおおむね8世紀初頭頃の年代が与えられる。3341Aや荒坂瓦窯跡群等例は檜隈寺式軒丸瓦のなかでも最も退化した型式とみられるから、その他型式の檜隈寺式軒丸瓦についてもおおむね8世紀初頭頃までの年代を与えられるだろう。そうした視点でながめると、石居廃寺の創建はその所在地域の開発順序から見て、藤原宮の造営がはじまってしばらく後のことと推測されるので、石居廃寺・森瓦窯跡3361A・3362Aにはおおむね持統朝前半頃（680年代後半）の年代を想定してよいだろう。

## 5. まとめ

檜隈寺式軒丸瓦の源流は、近江愛知郡の琵琶湖辺にある。すなわち、上岡部廃寺において素弁蓮華紋軒丸瓦1321A aの素紋縁に輻線紋を彫り加えた1321A bがあらわれ、それと下岡部廃寺の川原寺式軒丸瓦3131Aをモデルとして檜隈寺式軒丸瓦の原型がつけられたと推定される。下岡部廃寺3311Aがそれであり、上岡部廃寺・下岡部廃寺3351Aはその退化型式として出現したとみられる。そして、それが檜隈寺の金堂創建にあたって採用されるにおよび、垂木先瓦Bをモデルに3351Aを仕立て直して、洗練された瓦当紋様のⅡBがつけられ、ついで尾垂木瓦をモデルにⅡAがつけられたと考えられる。檜隈寺ⅡDも下岡部廃寺3311Aが退化した3321Aおよび檜隈寺ⅡAをモデルとしてつけられたと推定される。

檜隈寺ⅡA・ⅡB・ⅡD成立後の檜隈寺式軒丸瓦はすべて檜隈寺を起点として伝播している。すなわち、大和においては高市郡の橘寺・大窪寺、そして葛上郡の二光寺廃寺に檜隈寺ⅡA同範軒丸瓦が分布する。また、ⅡA型式に系譜づけられる軒丸瓦が紀伊の佐野廃寺式とかかわって、宇智郡の荒坂瓦窯跡群・西山瓦窯跡に分布する。天武朝には飛鳥から紀伊に至るルート重視して、檜隈寺と軽寺・大窪寺・巨勢寺に封戸を与えた（『日本書紀』朱鳥元年八月己丑条、辛卯条）との説をふまえると、ⅡA同範軒丸瓦等の分布は、檜隈寺がまさにこのルート上の寺院の檀越と関係をもっていたことを示唆すると受け取れる。

一方、近江では栗太郡の石居廃寺・森瓦窯跡3361Aおよび石居廃寺3362Aが檜隈寺ⅡBに系譜づけられ、下岡部廃寺3381Aが檜隈寺ⅡAに系譜づけられる。また、滋賀郡の南滋賀廃寺・崇福寺・長尾瓦窯跡3341Aは檜隈寺ⅡAとⅡDに系譜づけられる。檜隈寺を起点する、檜隈寺式軒丸瓦のこうした近江への伝播については、ⅡA同範軒丸瓦が分布をひろげる大和とはやや異質な、次のような歴史的背景を想定できるだろう。すなわち、乙巳変（645）後、不遇をかこった東漢氏は「七つの不可」を許された677年以降（『日本書紀』天武六年六月是月条）、天武政権内において一定の地位を回復して行く。檜隈寺創建の背景には、こうした時期に東漢氏一族の結集をはかるという目的があった

とみられる。上岡部廃寺や下岡部廃寺、南滋賀廃寺、石居廃寺は東漢氏配下の志賀漢人一族を檀越としたとみられるから、彼らはこうした情勢のなかで、下岡部廃寺の檀越を中心として檜隈寺の創建やその後の維持管理にも積極的にかかわったと考えられる。上述した檜隈寺式軒丸瓦の成立と展開は、東漢氏と志賀漢人一族の親密な関係を示すとともに、崇福寺の維持管理にもかかわった南滋賀廃寺の檀越の如く、近江各地の志賀漢人一族の経済的な実力の一端を示すと考えられる。志賀漢人の関係する寺院に多い瓦積基壇が大和で唯一、檜隈寺の講堂で用いられていることも、こうした歴史的背景のなかで理解できる可能性がある。

（きたむら よしひろ：企画調査課 主任）

## 謝辞

本稿の執筆にあたっては、下記の諸先生、諸機関より格別のご配慮を賜りました。ありがとうございました。

江南洋、亀田修一、古代瓦研究会、大津市埋蔵文化財調査センター、大津市歴史博物館、草津市教育委員会、彦根市立稲枝北小学校、滋賀県立琵琶湖文化館、滋賀県埋蔵文化財センター

## 註

- (1) 山崎信二「後期古墳と飛鳥白鳳寺院」(『奈文研創立30周年記念論文集 文化財論叢』同朋社 1983)。のちに山崎『古代瓦と積穴式石室の研究』(同成社 2003)に所収。
- (2) 小笠原好彦「宝光寺跡の造営氏族と性格」(『宝光寺跡発掘調査報告書』草津市教委 1987)。のちに小笠原『日本古代寺院造営氏族の研究』(東京堂出版 2005)に所収。
- (3) 小笠原好彦・大鷗潔「渡来系氏族の古墳・寺院研究の現状」(『季刊考古学』第60号 雄山閣出版 1997) P 16
- (4) 上原真人『瓦を読む』歴史発掘11(講談社 1997) P 66~67の図105
- (5) 1312B aと1312B aが同範であることは、範傷の一致することによって確実である。また、両者の先後関係については、仮に輻線紋縁を素紋縁化したとするなら、素紋縁は輻線紋縁よりも高くなるが、1312B aと1312B aのそれを較べても高さはかわらないので、素紋縁を輻線紋縁化したと考えるほかない。他例についてもこれと同理由から、素紋縁を輻線紋縁化したと判断できる。
- (6) 古代瓦研究会「飛鳥白鳳の瓦づくりⅩ—雷文縁・輻線紋縁・重閣紋縁の複弁蓮華紋軒丸瓦の展開—」(『奈文研』2006)
- (7) 第9回古代瓦研究会では、檜隈寺式軒丸瓦を輻線紋縁複弁蓮華紋軒丸瓦と表記しているのので、近江について報告した仲川靖氏は研究会のテーマに忠実であったといえる(『近江の雷文縁・輻線紋縁・重閣紋縁の複弁蓮華紋軒丸瓦』注③文献所収)。
- (8) 注④文献 P 86
- (9) 田辺征夫「古代寺院の基壇—一切石積基壇と瓦積基壇—」(『原始古代社会研究』4 校倉書房 1978)、田辺征夫「瓦積基壇と渡来氏族」(『季刊考古学』第60号)

- 00 製作技法については、清水昭博「大和の幅線紋縁・重圈紋縁複弁蓮華紋軒丸瓦」(注⑥文献所収)を参考とした。
- 01 岩本正二「明日香村檜隈寺の発掘調査」(『仏教芸術』136号 毎日新聞社 1981) P74では、奈良国立博物館「飛鳥白鳳の古瓦」(東京美術 1970)所収の軒丸瓦291番をⅡBの類例としてあげている。ここではこれをⅡB同範として扱う。
- 02 清水昭博「大和の幅線紋縁・重圈紋縁複弁蓮華紋軒丸瓦」注⑥文献所収
- 03 奈良国立博物館「飛鳥白鳳の古瓦」所収の軒丸瓦292番
- 04 大脇深「飛鳥の渡来系氏族寺院と軒瓦」(『季刊考古学』第60号) P66の図2の22。花谷浩「京内廿四寺について」(『研究論集』XI 奈文研 2000) P129の第29図の8。清水昭博氏は注⑥文献において保井芳太郎「大和上代寺院址」(大和史学会 1932) 図版18の疏瓦4を檜隈寺式軒丸瓦とするが、これは誤りである。
- 05 大橋信弥「近江における渡来氏族の研究—志賀漢人を中心として—」(『古代豪族と渡来人』吉川弘文館 2004) P204~205
- 06 高橋美久二「奈良時代の犬上氏」(『広報ひこね』906 彦根市 1996)
- 07 大橋信弥「錦部寺とその造営氏族—南滋賀廃寺試論—」(『古代豪族と渡来人』)
- 08 注⑥文献
- 09 肥後和男「大津京址の研究」(『滋賀県史蹟調査報告』第2冊 滋賀県 1929)
- 09 網俣也「北白川廃寺の造営過程」(『古代』97 早稲田大学考古学研究会 1994)
- 02 重岡卓氏が森1号窯跡採集品として紹介する重弧紋軒平瓦(「田原道をめぐる二つの地域」(『紀要』第9号 (財) 滋賀県文化財保護協会 1996) P138の図17の9)と、高井幹三郎氏が石居廃寺採集品として紹介する軒平瓦(「石居廃寺跡踏査記」(『田上のあしあと』民俗文化研究会 1973) 図版4)とは、断面実測図から受ける印象はかなり異なるが、同一個体の拓本を掲載しているとは考えられない。出土品が混乱している可能性がある。
- 02 これが組合式瓦範の留具痕であることは以前にも主張した(北村圭弘「湖東北部系瓦工についての覚書」(『仮称』滋賀県立大学整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』滋賀県教委 1995) P66の注⑨)。
- 02 このことについては注②文献で、瓦当裏面の下半部周縁に粘土紐を貼り付けて凸帯をつくる技法と想定したが、訂正したい。
- 04 南滋賀廃寺に範傷③がない個体(滋賀県立琵琶湖文化館蔵品)があることは仲川靖氏の指摘するとおりであるが(注⑥文献P36およびP47の写真2)、南滋賀廃寺にも範傷③がある個体があることは報告書の掲載写真でも確認できる(滋賀県教委「錦織・南滋賀遺跡発掘調査概要」Ⅱ(1987) 図版24の1)。
- 05 藤井保夫「紀伊の川原寺式軒瓦」(『飛鳥白鳳の瓦づくりⅥ』奈文研 2004)。なお、紀伊風土記の丘管理事務所「紀伊の古代寺院」(1993) P6 最上段写真の薬師寺廃寺出土軒丸瓦は荒坂瓦窯跡群例と同紋になる可能性がある。
- 09 注②
- 07 北村圭弘「近江の山田寺式軒丸瓦と犬上氏」(『近江の考古と歴史』西田弘先生米寿記念論集刊行会 2001)、北村圭弘「琵琶湖

東岸域の川原寺式軒瓦」(『飛鳥白鳳の瓦づくりⅥ』奈文研 2003)、北村圭弘「近江の山田寺式軒瓦」(『古代瓦研究Ⅱ』奈文研 2005)、北村圭弘「近江犬上郡以北と越前の重弁蓮華紋軒丸瓦—湖東式軒瓦を中心として—」(『飛鳥白鳳の瓦づくりⅩ』奈文研 2007)

#### 主要参考・引用文献 (注所引文献は原則として除く)

大和【檜隈寺】奈良県教委『重要文化財於美阿志神社石塔婆修理工事報告書』(1970)、奈文研「檜隈寺第1~5次の調査」(『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』10~13・17、1980~1983、1987)、加藤謙吉「東漢氏と檜隈」(『東アジアの古代文化』111号 大和書房 2002)

【二光寺廃寺】榎考研「御所市西北窪 二光寺廃寺」(2005)、廣岡孝信「二光寺廃寺」(『発掘された日本列島2006』朝日新聞社 2006)【荒坂瓦窯跡群・西山瓦窯跡】奈良国立博物館「飛鳥白鳳の古瓦」軒丸瓦233番、榎考研「近内遺跡発掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概報』1976年度 1977)、泉森皎「大和の『須恵』と窯跡群」(『文化史論叢』上 横田健一先生古希記念会 1987)、泉森皎「五條市周辺の窯跡」(『五條市史 新修』五條市役所 1987)大西貴夫「荒坂瓦窯跡及び周辺の出土遺物」(『飛鳥白鳳の瓦づくりⅥ』奈文研 2003)。

近江(近江の古代寺院刊行会「近江の古代寺院」(1989)はほぼすべての遺跡を網羅するため、いちいちの参考・引用文献としては掲出ししない)【上岡部廃寺・下岡部廃寺】愛智郡教育会「近江愛智郡志」巻1(1929)、滋賀県史蹟名勝天然記念物調査会「滋賀県史蹟名勝天然記念物概要」滋賀県学務部社寺兵事課 1936)、石田茂作「白鳳時代寺院址三題」(『考古学雑誌』第27巻第10号 1937)、奈良国立博物館「飛鳥白鳳の古瓦」軒丸瓦74番、谷口徹「彦根の古代寺院(一)」(『研究紀要』第3号、彦根城博物館)、滋賀県教委「土地改良総合整備関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ-1(1997)、滋賀県教委『県営一般農道整備事業関連遺跡発掘調査報告書』(1998)、彦根市史考古部『「新修彦根市史」編纂にともなう彦根市内遺跡・遺物調査報告書』(2004)【南滋賀廃寺】柴田實「大津京址(上)」(『滋賀県史蹟調査報告』第9冊 滋賀県 1940)、滋賀県教委「榎木原遺跡発掘調査報告」(1975)【崇福寺】肥後和男「大津京址の研究」(『滋賀県史蹟調査報告』第3冊 1931)、肥後和男「崇福寺に関する延暦僧録の記事」(『滋賀県史蹟調査報告』第5冊 滋賀県 1933)、柴田實「大津京址(F)」(『滋賀県史蹟調査報告』第10冊 滋賀県 1941)、滋賀県教委「榎木原遺跡発掘調査報告」、星野敏二「崇福寺跡」(『器瓦録想』伏見城研究会 2004)、梶原義典「最古の官営山寺・崇福寺—その造営と維持—」(『仏教芸術』265号 毎日新聞社 2002)【長尾瓦窯跡】滋賀県教委「榎木原遺跡発掘調査報告Ⅲ(1981)【石居廃寺・森瓦窯跡】肥後和男「石居廃寺址」(『滋賀県史蹟調査報告』第5冊)、重岡卓「森瓦窯再考—「田原道をめぐる二つの地域」補遺—」(『紀要』第11号 (財) 滋賀県文化財保護協会 1998)【安養寺廃寺】滋賀県教委「ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅲ-1(1976)宝光寺】草津市教委「宝光寺跡発掘調査報告書」(1987)、【穴太廃寺】滋賀県教委「一般国道161号(西大津バイパス)建設に伴う穴太遺跡発掘調査報告書Ⅳ(2001)【坂本八条廃寺】大津市教委「大津市埋蔵文化財調査報告書」10(1985)。

美作【五反廃寺】岡山県久世町教委「久世町埋蔵文化財発掘調査報告書」第2・4集(1997・2000)

#### 編集後記

本協会の紀要が今回で20号を迎えました。ようやく成人式を迎えたこととなります。これを機会に装丁を一新しました。

今回の紀要の内容は、時代区分では縄文時代から中近世まで、また、遺跡や遺構の評価や再検討を含め、遺物や資料の比較研究から考察に至るまで多岐にわたっています。いずれの論文にも、地域の歴史や文化の成り立ちと変容を解明しようとする熱い学究心が根底にあると信じております。

本書が文化財の保護のため、広く活用されることを心より願っております。

(編集担当 M. N.)

平成19年3月

### 紀 要 第20号

編集・発行 財団法人滋賀県文化財保護協会

大津市瀬田南大萱町1732-2

Tel. 077-548-9780(代)

<http://www.shiga-bunkazai.jp/>

E-mail: [mail@shiga-bunkazai.jp](mailto:mail@shiga-bunkazai.jp)

印刷・製本 三星商事印刷株式会社